

【4】 釈尊の入滅年齢に関する資料

[1] まず釈尊の入滅年齢に関する原始仏教聖典資料を検討する。

[1-1] 原始聖典において、釈尊の入滅年齢を伝える場面は大きく分けて3種に分かれる。1つは沙羅双樹における釈尊の入滅場面であり、もう1つはそれに先立つ悪魔に促されて3ヶ月後に入滅すると宣言する直前に、ヴェーサーリで雨安居に入られたときの阿難に向かって年を取ったことを述懐する場面、そしてもう1つは釈尊に先立って入滅した舍利弗・目連その他の入滅に関わる場面である。

[1-2] これらの時間的経過を推測すると次のようになろう。

後に考察する事柄であるが、釈尊の入滅をヴェーサーカ月の満月の日であるとしておこう。これは【論文2】で考察したように、中国暦の2月15日に相当する。

これに先立つ約3ヶ月前に釈尊は悪魔に促される形で、3ヶ月後に般涅槃をすることを宣言された。これはチャーパーラ・チェーティヤで休息されて、阿難に望むならば一劫でも生存できると示唆されたにも拘らず、阿難は悪魔に妨げられて更に生きることを懇願しなかったので、悪魔に「波旬よ、黙せよ、久しからずして如来は般涅槃するであろう。如来は今から3ヶ月経って、般涅槃するであろう」(apossuko tvam Pāpima hoti, na ciram tathāgatassa parinibbānaṃ bhavissati, ito tiṇṇaṃ māsānaṃ accayena tathāgato parinibbāyissati)と告げられた。そしてさらにヴェーサーリの近辺に住していた比丘達を招集して再び宣言された。これが入滅の2月15日に先立つちょうど3ヶ月前であるとする、これは11月の15日のことということになる。「仏所行讚」はこれを「雨安居の後に」⁽¹⁾とっており、おそらくこれは竹林村での雨安居を終えられた後のことであろう⁽²⁾。

釈尊はその前にヴェーサーリの近郊の竹林村で雨安居に入られた。そのときヴェーサーリは飢饉で、大人数の比丘たちが雨安居を過ごすことができなかつたので、比丘たちに縁者・知友を頼って分散して雨安居を過ごせと指示され、釈尊は阿難と二人で竹林村で雨安居を過ごされた。そのとき釈尊は阿難に年老いたことを慨嘆された。雨安居は4月16日から7月15日までであるから、その間のことであるとして、これを仮に6月15日であるとする、入滅の8ヶ月前ということになる。

釈尊はこの最後の旅を王舎城の靈鷲山から始められているが、舍利弗・目連その他に関わる記事の多くは後述するように舎衛国を舞台としている。もしこれが「涅槃経」のシーンにつながる直前のことであるとすれば、おそらくヴェーサーリでの最後の雨安居の前の年の雨安居は王舎城もしくは祇園精舎でなされたであろうと考えられる。もしこれを祇園精舎で過ごされたとする、少なくともこれは入滅の1年8ヶ月ほど前ということになる。

釈尊は雨安居の後しばらくを夏の大祭として弟子たちに接見する期間に充てられるのが常であったから、祇園精舎で雨安居を過ごされた釈尊は、祇園精舎を出発して王舎城に到着され、そこでしばらく過ごされてから、パータリプトラでガンジス河を渡られ、ヴェーサーリに到着して、4月6日に竹林村で最後の雨安居に入られたということになる。しかしヴェーサーリには雨安居に入られる少なくとも1ヶ月前には、春の大祭のために到着されていたであろう。

このような旅程をとられたものと仮定すると、後安居の1ヶ月後の9月15日ころに舎衛

城を出発された釈尊は、いったん王舎城に立ち寄られてから、すぐに出発して翌年の3月15日ころにはヴェーサーリに到着されたということになる。その間わずか6ヶ月である。しかしすでに老齢になられていた釈尊にはこの日程はいかにもきついという気がしないでもない。事実竹林村で雨安居を過ごされて後、沙羅双樹のところまで3ヶ月を要されているのである。舎衛城から王舎城、王舎城からヴェーサーリまでの距離は、おそらく竹林村から沙羅双樹までの距離の少なくとも5、6倍はあるであろう。それを6ヶ月ではいかにも強行日程すぎよう。

したがって王舎城でも雨安居を過ごされて、最後の旅に出立されたということも十分に推測できる。『増一阿含』26-9は舎衛国の祇園精舎におられた世尊が、夏安居を過ごすために舍利弗や目連などを引き連れて王舎城に行き、そこで夏坐を終わった時のこととして、目連・舍利弗の入滅に関連して、舍利弗が「釈迦文仏終不住一劫。又復諸天來至我所、而語我言、釈迦文仏不久在世年向八十、然今世尊不久当取涅槃」と語っている(3)。したがってこれによれば、釈尊は王舎城で雨安居を過ごされたあと、最後の旅に出立されたことになる。ということになれば、舍利弗・目連などとの関わりで語られる祇園精舎での出来事は2年8ヶ月も前であったこととなる。

一応このような時間的経過を予想して、以下に原始聖典の釈尊入滅年齢資料を紹介する。

- (1) 「仏所行讚」巻5 大正04 p.043下、梶山「ブッダチャリタ」23-62 p.261参照
- (2) 釈尊が3ヶ月後に入滅すると宣言されたのは、雨安居期間中ではないであろう。釈尊は雨安居に入られたときには寿命を捨てられずに留められたから、その時には入滅の決心をされなかったわけである。しかるに釈尊が3ヶ月後に入滅すると宣言されたのは、いったん留められた寿命を捨てることを決心されたからであって、この間にはそれ相応の時日が経過していたものと考えられる。
また最初に悪魔にこの宣言をされたのは、乞食に出られた後のチャーパーラ・チャイティヤにおいてであって、もし雨安居中であれば遠出はできなかったはずである。もっともこのチャイティヤは竹林村に近いところで、釈尊自身の雨安居中の乞食に支障はなかったとしても、ヴェーサーリに比丘たちを集めることは律の規定に抵触したであろう。したがってこの宣言は雨安居を終わった後のことでなければならない。
- (3) 大正02 p.640上

[2] 釈尊の入滅に先立って般涅槃した舍利弗・目連などの般涅槃に関わる場面で記された釈尊の年齢記事には次のようなものがある。

[2-1] 以下は「80歳」とする。

- ①MN. 89 Dhammacetiya-s. ; (釈迦国Sakkaの彌婁離Medaḷumpaにおいて波斯匿王の言として) 世尊も80歳、我もまた80歳である (bhagavā pi āsītiko ahaṃ pi āsītiko) 。 vol. II p.124
- ②MN. 12 Mahāsīhanāda-s. ; 舍利弗よ、私は年若い、老衰し、高齢で、人生の終わりに達し、齢傾いてすでに80である (ahaṃ kho pana Sāriputta etarahi jiṇṇo vuddho mahallako addhagato vayo anuppatto , āsītiko me vayo vattati) 。 vol. I p. 082
- ③中阿含213 法莊嚴經 ; (釈迦国Sakkaの彌婁離 Medaḷumpaにおいて波斯匿王の

言として) 我年八十、世尊亦八十。大正01 p.797中

④増一阿含 2 6 - 9 ; (舍利弗、目連の言として) 釈迦文仏不久在世、年向八十。然今世尊不久当取涅槃。我今不堪見世尊取般涅槃 (1)。大正02 p.640上

⑤増一阿含 4 1 - 5 ; (迦葉、阿難に法を付嘱して) 吾今年老、以向八十。然如来不久当取滅度。大正02 p.746中

(1) 「年向八十」は80歳になろうとしているという意味か。

[2-2] 次は「80余」とする。

①増一阿含 2 6 - 6 ; (祇樹給孤独園において阿難に) 今日如来年已衰微、年過八十 (1)。大正02 p.637上

②増一阿含 4 8 - 3 ; 吾今年已衰耗。年向八十余 (2)。大正02 p.789上

(1) 舞台は舍衛城であり、波斯匿王が登場する。ここでは「年過八十」とするが、これは「年過ぎて八十」とでも訓読すべきかもしれない。あるいは「80歳を過ぎた」と読むとしても、81歳、82歳になったという意味ではないであろう。

(2) この経は舍衛国の祇園精舎におられた釈尊が、阿難の将来仏の彌勒についての質問に答える下りで、釈尊が大迦葉に「吾今年已衰耗、年向八十余」といわれている。「年向八十余」は「年は八十に向かいて余あり」と読むべきかもしれない。ここには大迦葉比丘・君屠鉢漢比丘・賓頭盧比丘・羅云比丘の四大声聞は「要不般涅槃、須吾法没尽、然後乃当般涅槃」という記述もあるから、舍利弗・目連の入滅が予想されているのであろう。そして釈尊は迦葉に「般涅槃すべからず、……摩竭国界の毘提村の中、大迦葉は彼の山中に於て住せよ」と命じられる。

[3] 釈尊の3ヶ月後に入滅すると宣言する直前の、ヴェーサーリでの雨安居の場面に記されている年齢記事には次のようなものがある。すべて「80歳」とする。

①DN. 1 6 Mahāparinibbāna-s. ; 阿難よ、私は年老い、老衰し、高齢で、人生の終わりに達し、齡傾いてすでに80である (ahaṃ kho pan'Ānanda etarahi jīṇṇo vuddho mahallako addhagato vayo anuppatto , asītiko me vayo vattati.) 。 vol. II p.100

②長阿含 2 遊行経 ; 吾已老矣年粗八十。大正01 p.015中

③白法祖訳 ; 仏般泥洹経 ; 今仏年已尊且八十。大正01 p.164下

④失訳 ; 般泥洹経 ; 我亦已尊、年且八十。大正01 p.180上

⑤Mahāparinirvāṇasūtra ; さらに、アーナンダよ、人格完成者は、もう老い朽ち、歳を重ねて80歳となった。譬えば、古ぼけた車が二つの車輪によってやっと動いて行くように、仏は人格完成者は老い朽ち、歳を重ねて80歳となり、二つの車輪によってやっと動いて行くのだ (punar aparam Ānanda tathāgato vṛddho jīrṇatāṃ prāpto 'sītike vayasī vartate dvaidhānīśrayeṇa yāpyate tadyathā jīrṇaṃ śakatāṃ dvaidhānīśrayeṇa yāpyate evam eva tathāgato vṛddho jīrṇatāṃ prāpto 'sītike vayasī vartate dvaidhānīśrayeṇa yāpyate) 。 p.198

⑥SN. 4 7 - 9 ; 私は年老い、老衰し、高齢で、人生の終わりに達し、齡傾いてすでに80である (etarahi kho panāhaṃ jīṇṇo vuddho mahallako addhagato vayo anuppatto , asītiko me vasso vattati.) 。 vol. V p.153

⑦根本有部律・雜事 ; 年将八十。大正24 p.387中

[4] 釈尊の沙羅双樹の下での入滅場面に記されている入滅年齢資料には次のようなものがある。

[4-1] 年齢を明示するものは次の2点のみであって、2点ともに「79歳」とする。

①白法祖訳 仏般泥洹経；年亦自至七十有九。大正01 p.172下

②失訳 般泥洹経；「自我為聖師、年至七十九」大正01 p.188中

[4-2] 各種異訳の大般涅槃経によって、これまでの記述を表にすると次のようになる。

場所	パーリ	遊行経	白法祖	失訳	法顕	Skt.
竹林村	80歳となった	吾已老矣年粗八十	今仏年已尊且八十	年且八十		80歳となった
Cāpāla-cetiya	三月の後般涅槃	是後三月当取滅度	却後三月当般涅槃	是後三月当般涅槃	却後三月当般涅槃	3ヶ月過ぎて後に般涅槃
重閣講堂	三月の後般涅槃	是後三月当般涅槃	却後三月当般涅槃	仏後三月当般涅槃	却後三月当般涅槃	
ヴェーサーリーを振り返って			我今日寿竟	吾今夜半当般涅槃		
沙羅双樹	今夜最後更に般涅槃せん		我今日夜半当般涅槃		今日於後夜分入般涅槃	今夜中間の時刻に
Subhaddaに	29歳出家 51年遊行	我年29歳出家 我成仏今已50年	得仏説経49歳	昔我出家十有二年 道成得仏開説経法但50載	29歳出家 三十有六成道	29歳出家 出家後50年余
沙羅双樹	夜最後更に般涅槃	般涅槃	年自至七十有九	年至七十九		
沙羅双樹		2月8日	4月8日	4月8日		

[5] 出家年齢と入滅までの年数を示すものがある。これを加算すれば入滅年齢となるわけである。もっとも出家年齢に異説があるのであるから単純ではないが、とにかくそれは無視して出家から入滅までの年数を記す資料を掲げる。

[5-1] 以下は「50年」とする。

①長阿含2 遊行経；我年二十九 出家求善道 須跋我成仏 今已五十年 戒定智慧行 独処而思惟 今説法之要 此外無沙門。大正01 p.025中

②失訳 般泥洹経；昔我出家、十有二年、道成得仏、開説経法、但五十載。大正01 p.187下

③別訳雑阿含110；三十一出家 爾来過五十 推求諸善法 戒定行明達 一切諸世間 不知実方所 況知実法者 若修八正道 能獲於初果 乃至第四果 若不修八正 初果不可知 況復第四果 我於大衆中 説法師子吼 如此正法外 亦無有沙門 及与婆羅門。大正02 p.413下

ただし①③の「已五十年」「過五十」は、次項で紹介するパーリの“Mahāparinibbāna-s.”

やサンスクリットの“Mahāparinirvāṇasūtra”が‘vassāni paññāsa-samādhikāni’ ‘pracāśad varṣāni samādhikāni’ とするように「50年余」という意味であるとも考えられる。また、①は「我成仏今已五十年」とし、②は「道成得仏、開説経法、但五十載」とするから、成仏してから50年と読めなくもない。しかし①は出家を29歳、③は31歳とするのであるから、苦行を6年とすると、成仏は35歳、37歳となることとなり、もし50年を成道からの年数とすると、入滅は85歳、87歳とならなければならない。これは不合理であるから、出家からの年数と判断した。

[5-2] 以下は「50年余」とする。

①DN. 16 Mahāparinibbāna-s. ; 私は29歳で善を求めて出家した。スバッドよ、私は出家してから50余年、正理正法の地を遊行した (ekūnatimso vayasā Subhadda , yaṃ pabbajim kiṃ-kusalānuesī . vassāni paññāsa-samādhikāni , yato ahaṃ pabbajito Subhadda , nāyassa dhammassa padesa-vattī) vol. II p.151

②Mahāparinirvāṇasūtra ; 私は29歳で善を求めて出家した。出家してから50年余となった (ekonatriṃśo vayasā Subhadra yat prāvrajaṃ kiṃ kuśalaṃ gaveśī, pracāśad varṣāni samādhikāni yataś cāhaṃ pravrajitaḥ Subhadra) 。 p.376

③雜阿含979 ; 始年二十九 出家修善道 至道至於今 經五十余年 三昧明行具 常修於淨戒 離斯少道分 此外無沙門。大正02 p.254中

④根本有部律・雜事 ; 我年二十九 出家求善法 又五十余年 專行戒定慧 一心無散乱 唯求於正理 除斯真法外 無別有沙門。大正24 p.396下

[5-3] 以上のように原始聖典は出家から入滅までの年数を50年あるいは50年余とする。[5-1] の③は出家を31歳とするが、他のすべての原始聖典は出家年齢を29歳とするのであるから、「80歳入滅」をイメージしていたことは間違いなからう。

[6] 成道から入滅までの年数を掲げるものがある。

[6-1] 「49年」とする。

①白法祖訳 仏般泥洹経 卷下 ; 得仏説経四十九歳。大正01 p.171中 ; 開化導引四十九年。p.171下

②失訳 般泥洹経 卷下 ; 自我得仏、四十九歳。大正01 p.187上

[6-2] これは [5-1] でも考察したように、出家からの年数とも考えられる。しかしこの文章からはそうは読めない。ただし『失訳』は [5-1] の②において紹介したように、出家から50年とも理解されうる。苦行が1年という伝承はないから、成道から49年というのは不思議である。しかしこれは出家から成道までを12年とし、入滅を79歳とするから、19歳出家、足掛け12間の修行の後に30歳成道、成道から49年間説法されて、79歳入滅というイメージは成り立つ。

しかし【3】で述べたように、原始聖典の持つ共通のイメージは出家29歳、成道35歳であった。したがってこの共通イメージと以上の資料から導かれる出家19歳、成道30歳は齟齬を来す。そこで思い出されるのが、[5-1] に紹介した『長阿含経』の「遊行経」と『失訳・般泥洹経』の文章である。これらは「我年二十九 出家求善道 須跋我成仏 今已五十年」あるいは「昔我出家、十有二年、道成得仏、開説経法、但五十載」とするのであ

て、一見するところ成道から入滅までを「50年」としているように読めなくはない。しかしこれに相当するパーリ本やサンスクリット本は明らかに出家してからの年数であって、成道してからの年数とは読めない。したがって先の文章は「私は29歳で出家してから善道を求め、成道して、已に50年を経過した」と読むべきであろう。しかしここに紹介した資料は、これをつい成道から50年と解してしまったのではなかろうか。

[7] 仏伝經典には不思議なことに、仏滅年齢について言及するものは見いだせなかった。おそらく仏伝經典が、釈尊の一生をカバーするのではなく、途中で終わっているからであろう。

[8] 仏滅年齢に関するインド撰述文献には次のようなものがある。

[8-1] すべて「80歳」である。

①金光明最勝王經 卷1；壽命短促方唯八十年…壽命如是唯八十年。大正16 p.404下
；壽命短促惟八十年…壽命短促唯八十年。大正16 p.405上

②大智度論 卷9；在世八十余年。大正25 p.125上

③八大靈塔名号經；如是八十年住也。然後牟尼入涅槃。大正32 p.773中

[8-2] 出家から入滅までの年数についていうものがある。「50年」とする。

①大智度論 卷3；我年一十九 出家学仏道 我出家已来 已過五十歳 淨戒禅智慧
外道無一分 少分尚無有 何況一切智。（これは須跋陀に対する説法であり、入滅時の場面
である）大正25 p.080下

②尊婆須蜜菩薩所集論 卷10；（広説如雜阿含）二十九修跋陀人、我出家行学道、我
已知五十歳。於中学修跋陀。大正28 p.803下

しかし①は出家を19歳とするから、これからすると入滅は69歳となり不合理である。

[8-3] 成道から入滅までの年数をいうものがある。「45年」である。

①Mahāvamsa；五種の眼を持つ、比類ない勝者は45年の間活動されて (*pañcaccattāli-*
sa……*thatvā*)、世間のすべての事柄をすべての方法でなしおわって、クシナーラー
の沙羅双樹の間のよい場所で、ヴェーサーカ月の満月の日に (*vesākha puṇṇamāyam*)
世間の灯は般涅槃された。III-1~2 p.016

②善見律毘婆沙 卷1；世尊得阿耨多羅三藐三菩提、乃至涅槃時、於一中間四十五年。
大正24 p.675中

[9] 仏滅年齢に關説する中国撰述文献には次のようなものがある。

[9-1] 以下は「80歳」とする。

①大唐西域記 卷6；生年八十吠舍佉月後半十五日…三月十五日也、…迦刺底迦月後半
八日…九月八日也。大正51 p.903中

②仏祖統紀 卷2；今以如来八十寿除五十説法、則定取梵網・無相三昧・宝蔵經等、三
十成道之言。大正49 p.145上

[9-2] 以下は「79歳」とする。

①釈迦譜；（雙卷大般泥洹經云）自我為聖師至七十九。大正50 p.072上

②歴代三宝紀 卷1；如来在世七十九年。大正49 p.023中

③唐護法沙門法琳別伝 卷中；（周穆王五十二年壬申之歳二月十五日）佉年七十九方始滅度、故（涅槃經）云…。大正50 p.207中

④釈迦氏譜；（雙卷泥洹云）我爲聖師至七十九、所応作者並已究暢……。大正50 p.094上

[9-3] 「82歳」とするものがある。

①妙法蓮華經玄義 卷7下；棄国捐王六年苦行、三十四心断結成道、八十二歳老比丘身、詣純陀舍持鉢乞食、食檀耳羹、食訖説法、果報寿命中夜而尽入無余涅槃。大正33 p.768下

；佉父母生身、八十二尽、身灰智滅畢竟不生。大正33 p.769上

[9-4] 成道から入滅までの年数を「49年」とするものがある。

①歴代三宝紀 卷1；四十九年……説法教化。大正49 p.023中

[9-5] 成道から入滅までを「50年」とするものがある。

①大唐西域記 卷9；御世垂五十年。大正51 p.921上

②佉祖統紀 卷2；今以如来八十寿除五十説法、則定取梵網・無相三昧・宝蔵經等、三十成道之言。大正49 p.145上

[9-6] 成道から入滅までを49年あるいはあるいは50年とする伝承は、白法祖と失訳の『泥洹經』に基づいたものであろう。しかしそれが不合理であることはすでに述べた。しかしこれが独り歩きし始めたことによって、中国では19歳出家説が定着してしまったのではなかろうか。

[10] 以上紹介してきたように、原始聖典は釈尊入滅よりも1年半ないし2年半も前のことであつたと考えられる舍利弗・目連の般涅槃に関連する場面でも、入滅前8ヶ月ほどの竹林村での雨安居の場面でも、沙羅双樹の入滅場面でも、釈尊の年齢を等しく80歳とする。本来ならば78歳とか79歳とされなければならないところである。中には沙羅双樹の入滅場面での釈尊の年齢を79歳とする白法祖訳あるいは失訳の『般泥洹經』のような例もあるがこれは例外である。

また成道から入滅までの年数を49年ないし50年とするものがあつて、成道を30歳としなければ辻褄が合わない資料がある。しかしこれは出家からの年数が誤り伝えられたものと想定しておいた。

中国撰述の文献には成道を30歳とするものがあり、出家については19歳とするものが多いが、先述したように成道から入滅までの年数を49年あるいは50年とする誤った解釈に基づいたものと考えられる。あるいは出家年齢が29歳では遅すぎるという、中国の文化的背景があつたとも考えられる。